

学部・研究科名 応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 農芸化学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	特論・演習・実験科目のほか、分野横断的な選択科目（生体機能化学など）および論文英語・プレゼンテーション法など、大学院博士前期、後期課程にふさわしい授業を実施している。	大学院生への教育・研究支援は、所属研究室におけるセミナー、個別指導などを通じて手厚く行っている。	学生の研究活動、講義科目の成績、発表会などから総合的に評価している。	所属研究室における定期的なセミナー、専攻全体での中間発表会、および最終発表会などを通じ、継続的に学習成果を把握している。	評価アンケートの結果や各研究室の現状を教員間で共有し、会議の場で議論するとともに、継続的な改善に努めている。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッション・ポリシーに基づき、農芸化学に強い関心を持ち、食糧、環境、健康に関わる課題解決に取り組むことができる学生を求めている。大学院進学後に必要となる学力を評価するため、英語と農芸化学基礎（生物化学及び有機化学、無機化学）を試験科目としている。これらの筆記試験に加え、大学院指導教授による口頭試問により評価している。可否判定については、会議において、厳正・公平な審査を行っている。2 期入試受験者に対しては、口頭試問において、卒論研究に関するプレゼンテーションを行うことで適正を測っている。	試験後の選考会議において、専攻の教員間で十分に議論し、学生選抜の適切性を担保できるよう努めている。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	大学の理念・目的、研究科の教員組織の編成に基づき、専攻の教員組織の編成方針を作成し、本学のホームページ上で公開している。	各研究室に必要な人数の教員が在籍し、各教員の専門分野も専攻の専門性に沿っている。 採用時の面接で教育や研究に関する適正を測っている。	学内ルールに則り、教員の新規採用と昇任手続きを実施している。	FD セミナーなどに教員が積極的に参加している。	学科全教員もしくは大学院指導教授をメンバーとする会議体により、情報共有と意見聴取を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。
根拠資料名					

学部・研究科名 応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 醸造学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	醸造学専攻のカリキュラムポリシーに基づいて、醸造学にかかわる高度な研究者、教育者、専門家としての総合力を確立するために、特論科目、基礎科目、研究科目を配置している。	M2を対象として、6月に対面でのポスター発表会（中間発表会）を実施し、研究の成果と今度の方針について議論を深めた。また、応用微生物学特講ではZoomを用いて文献紹介も実施しており、対面のみならずオンラインでの発表にも対応できるようスキル向上に努めた。	シラバスに明示されている各科目の評価基準に基づいて成績を評価し、単位を認定している。また、学位審査及び修了認定は最終プレゼンテーションと質疑の内容を踏まえて、専攻内全指導（准）教授による会議にて客観的かつ厳格に行っている。	学生の学習成果は醸造学特別実習や特別研究科目を通じて各研究室において適切に把握し、評価している。また修士2年の中間発表会において他研究室の授業担当者からも評価を受けている。	必要に応じて専攻内教員の間で意見を交換し、教育課程の内容と方法の適切性を評価している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・オムニバス形式で実施する醸造学概論については、教員独自の高度な内容を含むようにしている。	【長所】 ・教員および院生同士でのディスカッションを通じて、総合力を養っている。	【長所】 ・最終プレゼンテーションに対しては、学位授与に資するかの判断を念頭に活発な質疑が行われている。	【長所】 ・中間発表会においては、他研究室の教員とディスカッションしており適切に学習成果を把握及び評価できている。	【長所】 ・なし
	【特色】 ・修士1年生の前期に醸造学概論、後期に応用微生物学特講と、醸造学とその基本となる微生物学について重点的に科目を開設している。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	推薦入試を 6 月 5 日に適切公正に実施し、4 名が合格した。大学院 1 期入試および 2 期入試については、希望者を対象に事前に説明会を実施し、入試制度を説明すると共に、専攻の特色やアドミッションポリシーについて説明をした。アドミッションポリシーに即した基礎学力を評価するため生化学（微生物学・分子生物学の内容を含む）と英語を入試科目とし、公正に選抜を実施した。	博士前期課程では定員（20 名）に対し、本年度合格人数は、40 名（推薦：4 名、1 期：15 名、2 期 X 名）とした。入試科目に関して、英語の科目では TOEIC の点数を対象とした方がよい か専攻内で検討し、その結果 TOEIC 試験の点数を対象としないこととした。よりよい試験科目の在り方について検討を継続していく。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・推薦入試では、高い GPA (3.00)を基準とすることで、大学院進学を目指す学部生に対して GPA に対するインセンティブを明確にできた。 ・1 期入試および 2 期入試では、事前に説明会を実施することで、アドミッションポリシーを理解した受験生を集めることができた。	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・推薦入試では、出願資格の要件として GPA3.00 以上と高い基準を設定している。	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・推薦入試については、学部生の学習意欲を高める効果をより生かすために、低学年次学生への積極的かつ適切な周知を行うことが望ましい。新学期のガイダンスなどでも紹介する。	【課題】 ・研究意欲のある学生に、他大学院よりも本専攻を選択してもらえるような指導を模索する。 また、英語の科目では TOEIC の点数を対象とした方がよいかなどよりよい試験科目の在り方について検討を継続していく。
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	・東京農業大学の求める教員像、東京農業大学大学院農学研究科教員組織の編制方針に基づき、醸造学専攻教員組織の編制方針を策定している。	・醸造学専攻の主要科目である醸造微生物学、微生物工学、酒類生産科学、発酵食品科学、調味食品科学、醸造環境科学の各特論に指導教員を配置している。指導(准)教授は 11 名であり院生数が増加するものの十分に対応できる。	醸造学専攻の教育・研究の将来計画に基づいて教員の募集、採用、昇格等を適切に行っている。 将来計画に基づき、今年度は指導教授 2 名の昇任が昇任され、次年度の指導(准)教授は 12 名となる。	教員の資質向上のための基盤づくりのための話し合いを行い、将来的な実施に取り組んでいる。	・研究室内の指導体制や教員組織体制について専攻内で議論している。学生からの聞き取り調査も行い、問題があれば対処できる体制をとっている。 ・大学院関連の会議報告や連絡を専攻会議だけでなく学科会議でも行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名					

2024（令和 6）年度 基礎的事項に関する点検・評価報告書

様式 1

学部・研究科名

応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名

山本 祐司

学科名・専攻名

食品安全健康学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	2020 年度に開設した博士前期課程および博士後期課程のカリキュラムは、文部科学省に届け出済みのものであり、カリキュラムポリシーに則って、食の安全並びに健康機能に関する問題解決力を身につけることを目論んだ編成になっている。なお博士前期課程の現カリキュラムは、2018 年度からの旧カリキュラムに一部修正を加えたものである。	英語論文購読という科目を設け、学生自ら英語論文を読み、理解し、教員・学生・院生同士の前での発表が組み込まれている。また、食品関連分野の専門家を招き、最先端の情報、食品関連に興味を持つ情報を積極的に提供している。学内研究発表会や修士論文発表会を通じて、発表を行うための準備方法、発表内容の構合力、分かりやすく伝えるプレゼンテーション力の向上を促すことに繋がった。	単位制度および学位授与は、1 年次の春に新入生ガイダンスを行い、学生全員に周知している。各教員が担当科目に対して、シラバス上で評価の方法を記載し、それに則って単位認定を行っている。また、成績評価、単位認定について質問がある場合には、指導教授、専攻主任、専攻主事から説明することとし、院生・指導教員間の対話を重視するよう促している。	各科目において、進行過程で出席状況を、レポート等の提出により理解度を把握することで、必要に応じて適切な補強指導を行っている。また、科目の終了時には、院生によるプレゼンテーション等によって学習成果の達成度を把握し、院生自らから発信することで、適切な評価に反映できるよう配慮している。	学期末に実施された学生による授業評価アンケートについて、その結果を各教員に周知し、次年度以降の授業内容の改善を促すようにしている。さらに、院生からの評価が低い項目については、各科目担当のみならず、専攻全体としても改善措置を講じている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・現在、研究を遂行する上で、最も重要となる研究倫理を必修としている。また、食品科学分野の研究に必須であり、最先端の情報を取得、理解できるような編成にしている。また、自分の発信した成果を他人に分かりやすく発表できるためのプレゼンテーションスキルについても学べるカリキュラムになっている。	【長所】 ・2024 年 11 月に全学的に実施された学内研究発表会では、専門領域が異なる教員、院生はもちろん包括連携協定を締結している企業研究者にも研究内容を評価してもらうことにより、専攻内で行うトレーニング以上にプレゼンテーション力をつけることができる。	【長所】 ・入学時の新入生ガイダンスでの説明により、修了に必要なとされている 30 単位のうち、1 年次で概ね 20 単位を履修し、所属する全大学院生の大半が単位を取得している。	【長所】 ・大学院では、受講者数が少ないため、レポート内容のプレゼンテーションやディスカッションなど、アクティブラーニングを導入している科目も多数ある。	【長所】 ・例年行われているシラバスの第三者チェックにより、講義内容についてもできるだけ踏み込んだ確認を教員間で実施している。
	【特色】 ・食の安全性・機能性を学んだ上で、より高度なで領域を見据えた専門科目が設置されている。	【特色】 ・専攻として、専門領域の学会における外部発表を促している。研究内容が社会に実装している一面を大学院生が認識できるよう個々の指導教員も心がけている。	【特色】 ・修士論文並びに博士論文研究を遂行させつつ、無理のない範囲で大学院講義科目が配当されている。講義への出席状況、課題対応などは学課教員間で共有されている。	【特色】 ・大学院生として、より専門性を高めたディプロマ・ポリシーに掲げられている食品の安全性、衛生管理、機能性評価などについての専門的知識の修得に繋がるように講義が配当されている。	【特色】 ・教育課程及びその内容、方法の適切性については、定期的に繋がりのある指導教員間の連携を図るよう、組織内で努めている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・専攻内の専門分野が多岐にわたるため、専攻内における相互評価が必ずしも的確に機能しないと考えられる。 ・外部有識者をはじめ、各教員が学内にとどまることなく、外部研究機関との連携を模索していく必要がある。	【問題点】 ・専門領域の違いから、外部学会発表数も研究室による差が生じている。 ・外部発表の機会を通して、プレゼンテーション能力の向上にも繋げていくことを目的としているが、その効果の見極めにも至っていない。	【問題点】 ・大学院の各課程における講義はいずれも順調に開講された。単位取得上、問題となる事象は捉えられない。	【問題点】 ・実際の大学院生からの授業評価アンケートにおいて、学習成果が十分であったと考えられたが、その習熟度を実際に確認していく必要もあると考えられた。	【問題点】 ・実際に、年度内に教育課程及びその内容、方法の適切性について点検・評価はなされている。一定期間による評価を設定する必要があると考えられた。
	【課題】 ・個々の教員が、外部関連団体における積極的な活動を展開し、研究的価値を高める努力を怠らないよう心がける。 ・今後は外部専門機関との連携を促進させる必要がある。	【課題】 ・大学院生の発表における取り組みについては、指導教員間における温度差もある。今後は組織内でより周知して博士前期課程の専攻内における中間発表会を催すなど、活発化していく必要があると考えられた。	【課題】 ・単位認定並びに学位授与を適切に遂行している。	【課題】 ・指導教員によって講義面の対応が異なるので、各教員においては授業評価アンケートの回答を真摯に受け止め、当事者意識を持って問題点を明確にする必要があると考えられた。	【課題】 ・今後は半期ごとに区切るなど、明確な管理の方法を内外に示していく必要があると考えられた。大学院生の学内発表会などの行事において、大学院生のみでなく、指導教員間でも相互に議論し、切磋琢磨できる機会を構築していく必要があると考えられた。
根拠資料名		資料 2 大学院生の学会参加数と発表数の調査			

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	推薦入試、一般入試(1 期、2 期)においては、事前に適切な大学院入試説明会を開催し、学生への進学を促すとともに専攻のアドミッション・ポリシーを十分に説明した。	入学後の 1 年次博士前期課程の院生について、研究の進捗を確認と問題点の抽出を行なった。その結果、これまでになく専攻内の院生同士にまとまりがあり、お互いの修士論文研究についても関心があり、共有化を希望する声が多かった。これを受け、多岐にわたる専攻内の研究を互いに知る機会を設定する必要があると考えられた。次年度以降に、これまで実施してこなかった大学院博士前期課程の中間発表会を提案するまでに至った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・入試については、今年度より英語における TOEIC スコアによる試験を開始した。その他に、生物・化学の基礎的科目にも共通する 4 科目、研究室ごとの選択科目、面接により公正な評価に基づく入試判定がなされた。	【長所】 ・専攻内の大学院生と指導教員は、いい距離感を保って接しており、指導教授のみならず専攻内の各教員とも良好な関係性を築かれ、院生の指導にあたっている。そのため、問題点の把握においても早めに対応してすることが可能となっていると考えられた。
	【特色】 ・日頃の学生指導を通して、よりアドミッション・ポリシーを意識した大学院生の募集に取り組んだ。	【特色】 ・専攻内の大学院生として、研究室指導教員のみならず、専攻内の指導教員に問題点を周知することにより、問題の早期改善に繋がるように心がけ、専攻内運営を遂行した。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・専攻内の大学院生数の確保のため、指導教員として自らが日頃の指導において大学院生の受け入れ姿勢を明確にしていく必要もあると考えられた。	【問題点】 ・大学院進学後に休学や退学など、途中で大学院継続を断念しなければならない学生も、少ないながら見受けられる。研究の推進のみならず精神衛生上もフォローすべく指導教員から日頃よりコミュニケーションをとることも必要であると考えられた。
	【課題】 ・今後、大学院受験者数の同行を予測し、専攻として大学院生の受け入れ方針を含むポリシーの内容をよりよく改訂していく必要があると考えられた。	【課題】 ・より専攻の方針に適した大学院生の確保に繋がるよう、定期的に受け入れに関するアドミッション・ポリシーの見直しや方針の改善を促していく必要があると考えられた。
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	今年度は順調に専攻運営が進んだ。次年度に向け1名の指導教授の申請を提出し、承認いただいた。	①項と同様に、将来構想を明確にすることを目的として、組織の問題点を明らかにし、共有化することをつとめている	今年度は順調に専攻運営が進んだ。次年度に向け1名の指導教授の申請を提出し、承認いただいた。今後は学科内の准教授の昇格も鑑み、指導教授の適切な任用を計画していく必要がある。	教員の資質の向上を図るため、研究室教員の学会活動の件数や外部委託研究の有無などを毎年確認している。また、大学院生からの授業評価アンケートに基づいて、大学院生からの評価を真摯に受け止めていく姿勢が必要となる。その結果、個々の向上が、多面的に学科組織の改善に繋がるように心がけ対応した。	教員組織の適切性を図るため、④項と同様に、学会活動や外部委託研究の有無、大学院生からの授業評価アンケートの確認や改善計画を促している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・専攻内教員は適切に配置され、これまでの方針に基づいた運営がなされている。	【長所】 ・①項と同様に、運営がなされている。	【長所】 ・今年度は、当初の枠取り申請からの予定通り、1名の助教（任期制）が採用された。	【長所】 ・今年度は、専攻内の指導教授ないし補助教員の各自のキャリア形成を充実させるためのサポート意識が高まった。	【長所】 ・専攻全体並びに各研究室における取り組みとして、適切性について点検するよう進めている。
	【特色】 ・専攻開設から7年目となり、専攻内教員組織の入れ替え、方針の見直しを要する時期を迎えている。	【特色】 ・①項と同様	【特色】 ・これまでの専攻内採用計画に基づき、採用、昇格は滞りなく進んでいる。	【特色】 ・専攻内は風通しよく、若手指導補助教員のサポートにも努めている。	【特色】 ・専攻内の各研究室ないし各指導教員の専門が多岐にわたっている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・今後、数年以内に連続して専攻内指導教授が退職を迎える。今後の専攻における方針の見直しや人事計画が必要となる。	【問題点】 ・①項と同様	【問題点】 ・①項と同様	【問題点】 ・組織として、次年度以降に指導教授の退職が連続することとなる。今後の指導教授の入替による専攻運営の見直しも必要となる。	【問題点】 ・専門分野が別れており、指導教員の資質として、その適切性を的確に評価できているのかが明らかではない。
	【課題】 ・専攻内の各研究室の運営や専攻全体の方針を見据えた中長期的な採用計画を策定する必要がある。	【課題】 ・①項と同様	【課題】 ・①項と同様	【課題】 ・専攻における中長期的な採用計画の見直しが必要であると考えられた。	【課題】 ・指導教員としての確に組織に属しているのかを見極めるため、発表論文数、外部資金獲得なども考慮して総合的に評価する必要がある。
根拠資料名				資料 2：20250228 包括的点検評価報告用業績調査_研究室毎集計	資料 2：20250228 包括的点検評価報告用業績調査_研究室毎集計

学部・研究科名応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名山本裕司

学科名・専攻名食品栄養学専攻

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	前期課程では、公表されている教育課程の編成・実施方針に記載された(1)、(2)、および(3)の各項目全ての授業科目を開講し、学位授与方針に掲げた能力の涵養を図っている。後期課程では、公表されている教育課程の編成・実施方針に記載された(1)の項目に記載された授業科目を開講し、学位授与方針に掲げた能力の向上に適切な内容で編成されている。	研究活動の活性化を促進するために、本専攻内の各分野に関係する外部機関所属研究者を招き先進的な内容についての特別講義を開催した。開催数は昨年度と同数であった。	学生便覧等に明示されている卒業・修了要件に則って行った。具体的な論文審査として、修士は「公開審査会」及び合議制の「専攻内審査会」により審査を実施・承認した。博士学位論文審査は、必要な論文数を明示し、「公開審査会」並びに合議制の専攻内の「審査報告会」開催による審査を実施した。審査は「学位論文審査基準、評価方法及び最終評価」に基づき、審査結果は、研究科委員会で報告し、承認を受けた。	博士前期課程の学生には、教育・研究活動、論文内容、「公開審査会」および「審査報告会」を通じて、総合的に(1)学力、(2)論理的思考、(3)問題解決能力および(4)コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力を評価した。博士後期課程の学生は、研究活動、論文内容、「公開審査会」および「審査報告会」を通じて、要求される(1)体系的知識と分析力、(2)問題解決に向けた指導的能力および(3)国際的な発信力を評価した。	シラバス内容を、専攻内のシラバス検討委員会で確認、検証を行い、教育の改善・向上に役立てている。また、授業評価アンケートの結果と改善策を教員間で共有している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	令和6年度大学院授業実施報告書、評価報告2024◆専攻3ポリシー、◆大学院カリキュラム、◆2024年度大学院学生便覧、◆大学院シラバス	2024食品栄養学専攻特別講義一覧（資料1）	大学院学生便覧2024、大学院農学研究科委員会議事録、◆学位論文審査基準、◆「公開審査会」並びに合議制の専攻内「審査報告会」の実施記録（資料2、3）、2024修了判定根拠資料（資料4）	◆学位授与方針に関する評価基準、◆専攻内の「審査報告会」の実施記録（資料2、3）	◆2024F授業評価アンケート（資料5）、◆授業評価アンケートに対する改善計画書（資料6）

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッション・ポリシーとして、入学前の (1) 学習歴・学力水準、(2), (3) 入学希望者に求める水準等の判定方法、(4) 能力を設定し、ホームページ上にて適切に公開した。受験生募集は、大学院のホームページにて学生の受け入れ方針を明示したうえで実施した。入学者選抜制度は、学内推薦入試と学内外の受験生の公平性を担保したⅠ期とⅡ期の一般入試を適切に設定し実施した。入学者の選抜は、全ての入学試験において専攻内の研究指導教員より構成される入試選考委員による面接ならびにその後の専攻主任教授を委員長とする入試選考委員会の公正な審査を経て適切に行った。	学内推薦入試とⅠ期およびⅡ期の一般入試の入試選考委員会において、学生受け入れの適切性について、選考委員間で十分に議論した。
現状説明を踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた 問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻3ポリシー、◆大学院入試募集要項、HP等	

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	応用生物科学研究科および食品栄養学専攻の教員組織の編成方針は、本学のホームページ上に公開している。	食品栄養学特論ならびに人間栄養学特論の必修の特論科目に関しては、指導教授ならびに指導准教授など教育上主要と認められる教員が担当している。また、柱科目である選択科目の特論科目に関しては、すべての科目に少なくとも 1 人以上の指導教授あるいは指導准教授が担当しているなど、適正に教員が配置されている。	専攻における人事計画に沿って、「大学等の設置基準」をもとに適切な職位ごとの充足を行っている。また採用・昇格に関しては、東京農業大学教員資格審査マニュアルに則り「5 年以内の責任著者としての 3 報以上を有する」ことの取扱いなど、厳格な運用が行われている。	前学期・後学期に実施される授業アンケートの結果を大学院担当教員に回覧することで共有し、その結果から問題点や課題を抽出し、適切な改善計画の策定を行うなど教育および教員組織の改善を適切に実施している。	教員の研究業績、社会活動について研究室ごとに取りまとめて、次年度以降の活動の意識付けをしている。また、専攻会議において、教員組織の適切性について、専攻教員配置表等を元に、適宜、検討を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・「5 年以内の責任著者として最低 3 報」をコンスタントに維持することが難しい点。	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・中長期の人事計画のみならず組織改革など突発的な事象にも対応可能な論文作成計画を立案する。	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆専攻の教員編成方針	◆学科（専攻）教員配置表—年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料 7-1）、◆大学院カリキュラム、◆大学院学生便覧	◆学科（専攻）教員配置表—年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料 7-1）、◆専攻人事計画書（資料 7-2）、◆教務職員資格審査基準及び関連書類	◆2024F 授業評価アンケート（資料 5）、◆授業評価アンケートに対する改善計画書（資料 6）	◆学科（専攻）教員配置表—年齢、性別、国際性、職階を示すもの（資料 7-1）、◆専攻人事計画書（資料 7-2）、◆教務職員資格審査基準及び関連書類、◆令和 6 年度活動報告（資料 9）

学部・研究科名 応用生物科学研究科
学部長・研究科委員長名 山本 祐司
学科名・専攻名 農芸化学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	農芸化学を総体的に理解する。	研究成果を発信する。	
実行サイクル	___ 4 ___ 年サイクル（令和5年～令和8年）	___ 4 ___ 年サイクル（令和5年～令和8年）	
実施 スケジュール	講義科目を中心に研究室毎に外部講師を手配し、各専門領域での先端的な研究に触れ、農芸化学を総体的に理解する。	プレゼンテーション法、農芸化学特別演習、特別研究指導などにおいてプレゼンテーションに関する技術を修得する。	
目標達成を測定する指標	該当科目の成績及び授業評価により判断する。	該当科目の成績及び授業評価、学術論文掲載数、学会発表数により判断する。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明			
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	研究成果の発信	研究業績の発信	
実行サイクル	____4____年サイクル（令和5年～令和8年）	____4____年サイクル（令和5年～令和8年）	_____年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール	教員毎に適宜、学術論文などの投稿、学会での発表を行う。	定期的に自己点検システムの更新を教員へ促す。併せて、学科 HP 内に学科ニュースリリースを設置して、研究に関するトピックスを発信する。	
目標達成を測定する指標	学科 HP で内容を確認する。	学科 HP で内容を確認する。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学科 HP 内で適切に掲示されていた。	学科 HP 内で適切に掲示されていた。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・
	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・次年度も継続的に実施する。	【課題】 ・
根拠資料名	学科 HP	学科 HP	

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標			
実行サイクル	_____年サイクル（ 年～ 年）	_____年サイクル（ 年～ 年）	_____年サイクル（ 年～ 年）
実施 スケジュール			
目標達成を測 定する指標			
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明			
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

学部・研究科名 応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名 山本 祐司

学科名・専攻名 醸造学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	酒類生産学、発酵食品学、醸造微生物学、微生物工学、調味食品科学、醸造環境科学の専門分野における特論科目を通じて、各専門分野における確かな知識と技術を修得する。	プレゼンテーション法を通じて口頭発表を行う能力を高める。	博士後期課程への進学者を確保する。
実行サイクル	__ 1 __ 年サイクル（令和6年）	__ 1 __ 年サイクル（令和6年）	__ 1 __ 年サイクル（令和6年）
実施 スケジュール	酒類生産学、発酵食品学、醸造微生物学、微生物工学、調味食品科学、醸造環境科学の専門分野における特論科目を実施するとともに、最新の知見、技術の導入により内容の充実化を図る。	博士前期課程2年の学生を対象に中間発表会(ポスター形式)および最終発表会(口頭発表)を実施する。また、大学院全体で開催されるポスター発表会への参加を促す。	醸造学専攻特別講義を1年間に2回開催し、研究職の魅力をアピールする。
目標達成を測定する指標	専攻内の研究発表、学会発表、就職状況から知識と技術を修得状況について総合的に判断する。	ポスターおよびスライドの完成度、プレゼンテーション技術、質疑応答の状況から総合的に判断する。	博士後期課程進学者数から評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	・専攻内の中間発表会や最終発表会の内容は十分に高いレベルであり、また就職状況も、醸造関連から化学系の企業まで幅広い企業に就職していることから、特論科目を実施する中で、最新の知見と技術を修得できたと判断した。	・博士前期課程2年生について、対面でのポスター発表会（中間発表会）と口頭発表会（最終発表会）を行い、活発な質疑応答がなされた。また両発表会の準備として各研究室でプレゼンテーションを指導した。発表会実施について学部生と大学院生全員を対象に周知し、発表者以外の参加もみられた。	・醸造学専攻特別講義を2回実施し多くの大学院生が参加した。博士後期課程の進学者はおらず、引き続き研究職の魅力をアピールする他各教員もいきいきと研究にのぞむ様子を魅せていく。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科と専攻において最新の分析機器を運用することで、新しい技術の修得にも力を入れている。	【長所】 ・特になし	【長所】 ・特になし
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学科・専攻共通機器の効果的運営	発酵・醸造分野における研究発表、および外部資金の申請を積極的に行なう。	関連する公的機関や企業等との連携を推進する。
実行サイクル	____ 4 ____ 年サイクル（令和 5 年～令和 9 年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和 6 年）	____ 1 ____ 年サイクル（令和 6 年）
実施 スケジュール	策定したルールに則り、各研究室で積極的に共通機器を利用する。 機器操作について講習会などを実施する。	各種関連学会・関連学術雑誌における発表を積極的に行なう。科研費を始めとする外部資金の公募時に積極的に応募する。	年間を通して、公的機関や関連業界の企業との共同研究等を積極的に行なう。
目標達成を測定する指標	既存の共通機器についてより多くの研究室が利用することを目標とする。策定したルールについては、必要な場合には実状に応じた改訂を行う。	・学会発表は、専攻で年間 20 件以上を目標とする。 ・外部資金申請は、専攻で年間 6 件を目標とする。 ・できる限り Impact Factor (IF) の高い雑誌への投稿を行なう。	専攻全体として、年間 10 件以上の公的機関或いは企業と連携することを目標とする。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	共通機器の精米機を複数の研究室で利用している。共通機器である GC/MS, LC/MS を担当研究室の管理のもと運用している。今年度は新たに共通機器としてメタボローム解析用 LC-MS/MS を導入し運用した。学部共通機器について担当者を決め、運用等についての情報を共有している。	・学会発表数は専攻で 55 件と昨年度より 21 件増加した。論文発表数は 17 件であり、昨年度より 1 件増加した。外部資金申請は本年度 17 件で昨年度よりも 11 件減少したが、これは科研費等は採択期間中は申請できないためである。今年度発表論文のうち、IF の高いものは 3.8 であった。以上の様にいずれも目標も達成した。	・公的機関、企業との共同研究が 67 件あり、十分に達成していると考えられる。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・共通機器を特定研究室が管理することで大きな故障等を起こさずに運用できている。	【長所】 ・特になし	【長所】 ・各研究室が、それぞれの担当領域に応じた適切な連携を行なっている。
	【特色】 ・これまでに明らかにされていない醸造物中の新規な成分の発見につながる。	【特色】 ・発酵・醸造分野においてレベルの高い研究を実施できており、各研究室で活発な研究発表と論文発表が行われている。	【特色】 ・醸造関連企業との連携のみならず、地域活性化に関わる共同研究を実施している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・各教員の研究時間の確保が難しく、全ての研究室にて運用できていない。特定管理者のみの留まらずワーキンググループを積極的に活用していく必要がある。	【問題点】 ・教員の研究時間の確保が難しい。	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・将来的な共通機器購入のための継続した話し合いも必要である。	【課題】 ・英語の学術論文への投稿を増やし、引き続き論文投稿を継続していく。また、研究成果の発表および外部資金の獲得を積極的に行なう。	【課題】 ・特になし
根拠資料名			

学部・研究科名
学部長・研究科委員長名
学科名・専攻名

応用生物科学研究科
山本 祐司
食品安全健康学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	研究推進力を高める	プレゼンテーション能力を高める	
実行サイクル	____1____年サイクル（令和6年）	____1____年サイクル（令和6年）	____年サイクル（令和____年～____年）
実施 スケジュール	1. 外部学会発表、論文発表数を増やす。（1年間） 2. 外部資金獲得を増やす。（1年間）	1. 学会での発表を積極的に行う。（1年間） 2. 大学内におけるポスター発表会でのポスター作製、ポスターを用いた質疑応答を行う。（1年間）	
目標達成を測 定する指標	1. 外部学会発表、論文発表数を確認する。 2. 外部資金獲得の件数を確認する。	1. 大学院生の学会での発表数を確認する。 2. ポスター発表会での発表数を確認する。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	前年度を上回る外部学会発表、論文発表数を確認した。 さらに、例年と同等の外部資金獲得の件数で推移していることを確認した。	前年度を上回る大学院生による学会発表、論文発表数を確認した。 さらに、該当学生全員による学内ポスター発表会での発表を確認した。	
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・継続して、年度内の外部学会発表、論文発表数を維持している。	【長所】 ・年度内において、一定数の外部学会発表、論文発表数を維持している。	【長所】 ・
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・本目標を引き続き継続していく必要がある。	【問題点】 ・本目標を引き続き継続していく必要がある。	【問題点】 ・
	【課題】 ・より多い外部学会発表、論文発表数、外部資金獲得件数を目標として掲げていく必要がある。	【課題】 ・ディプロマーポリシーに則り大学院生の達成感を高める活動として外部学会発表、論文発表を促していく必要がある。	【課題】 ・
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	食の流通のグローバル化により、市場には新たな食材や加工食品があふれ、人々は豊かな食文化を楽しむ一方で、在来・外来の食材が食の安全が脅かされる危険もあることを知る必要が高まっている。こうした「食の安全・安心」をはじめ「食の機能と健康」を科学的に解明する研究拠点となり得るよう食品安全健康学専攻の教育・研究内容について、より広く社会に発信していく。		
実行サイクル	____1____年サイクル（令和6年）	____年サイクル（令和____年～____年）	____年サイクル（令和____年～____年）
実施 スケジュール	年度内半期ごとに、学会発表数、論文投稿数に加えて、高校における模擬講義、学内・学部主催のイベント、外部からの依頼や問い合わせなどに積極的の応じ、その件数をモニターして、より一層の広報活動並びに内外への啓蒙活動を活性化していく。		
目標達成を測定する指標	前年度を上回る外部発信の実績の有無、外部獲得資金の増減を指標とする。		
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	概ね前年度と同様の外部発信数、外部獲得資金の獲得数を確認した。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・食の安全・健康は社会のニーズが高く本学科の強みである点を明確にしていくことが必須と考えられる。	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・継続して外部発信数、外部獲得資金の獲得数を確認し、各研究室の実績を伝えるため努力している。	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・本目標を引き続き継続していく必要がある。	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・本専攻のディプロマーポリシーを具体的に大学院生に伝えるため、各研究室の実績として内外に示していく必要がある。	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	今後の食品企業では、安全・安心と、機能性食品などの新たな市場へのそれぞれに対応できるバランスのとれた人材が求められている。また行政にとって、食品市場の環境が変化していく中で食の安全・安心を守るための取り組みと、より多様化する機能性食品市場を規制する取り組みが必要となっており、同様にバランスがとれた人材が求められている。このような背景のもと、本専攻のディプロマポリシーにある「食品安全健康学科は、食の安全と健康機能の専門領域における確かな知識と技術、研究能力を修得し、食の安全と健康機能上の問題解決力を身に付けている人材」であることを広く食品企業等関連業界に周知させていく。	受験者数の増加を図る。	
実行サイクル	1 年サイクル（令和6年）	2 年サイクル（令和6年～令和7年）	年サイクル（令和 年～ 年）
実施 スケジュール	1. 学会の懇親会・交流会に積極的に参加し、企業関係者への学科PRを行う。	1. 食品安全健康学科学生に対して、講義等を通じて、研究の意義、研究職の魅力をアピールする。 2. 食品安全健康学科学生に対して、毎年、大学院での研究、研究職の魅力などについて、学期最初に行われるガイダンスなどを通じてPRする。	
目標達成を測定する指標	1. 参加学会懇親会数を確認する。 2. 問い合わせを受けた企業数を確認する	1. 令和6年度食品安全健康学専攻受験者数を確認する。 2. 専攻説明会の回数、参加人数を確認する。	
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	例年と同様の参加学会懇親会数、問い合わせを受けた企業数を確認した。		
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・引き続き、一定数の参加学会懇親会数、問い合わせを受けた企業数が維持されている。	【長所】 ・	【長所】 ・
	【特色】 ・なし	【特色】 ・	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・本目標を継続していく必要がある。	【問題点】 ・	【問題点】 ・
	【課題】 ・企業懇談会や独自の接点からの求人对応数、学生からの注目度が高い企業への就職率、行政官・食品衛生監視員など官公庁への就職数を増やし、本専攻の特色を内外に示していく必要がある。	【課題】 ・	【課題】 ・
根拠資料名			

学部・研究科名 応用生物科学研究科

学部長・研究科委員長名 山本祐司

学科名・専攻名 食品栄養学専攻

1. 教育に関する総合的事項

	①
目 標	カリキュラムポリシーに基づいて体系化されたカリキュラムを通じて食品栄養学の各専門分野における最新の知識と技術を習得する。
実行サイクル	__ 1 __ 年サイクル（令和6年）
実施 スケジュール	食品栄養学の幅広い専門的基礎知識や技術、研究手法を主体的に修得することを目的として、必修科目である食品栄養学特論および人間栄養学特論をはじめ、食品栄養学特別演習および食品栄養学特別実験をⅠ～Ⅳに細分化して段階的に目標を定めて実施することで知識や技術の習熟度を鑑みながらきめ細やかな研究指導を行う。各専門分野の最新の知識および技術を習得できるように食品生化学、フードシステム管理学、調理科学、栄養生理学、保健栄養学、臨床栄養学の専門分野における特論科目も実施することで内容の充実を図る。
目標達成を測定する指標	（１） 専攻内の研究発表および学会発表から知識と技術を修得状況について総合的に判断する。 （２） 学生による授業アンケート結果により評価する。
自己評価 （☑を記入）	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻内からの研究発表については、34 演題の学会発表、8 演題の 2024 年度大学院研究発表会（博士前期課程 5 演題、博士後期課程は大学院博士後期課程研究支援制度成果発表 2 演題、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム成果発表 1 演題）があった。2024 年前学期の授業評価アンケートでは、授業内容を理解するために積極的に取り組みましたか？について「強くそう思う」が 50%。「そう思う」が 50%であり、出席状況も「90%以上」との回答が 100%と、良好な出席状況が確認されたことから、本専攻でのカリキュラムは在籍した院生に最新の知識と技術を習得するのに寄与したと考えられたため、自己評価としては達成できたと考えられた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆令和6年度活動報告（資料9）、◆2024年度東京農業大学大学院生研究発表会演題一覧、◆2024F 大学院授業評価アンケート（資料5）

2. 研究に関する総合的事項

	①
目 標	栄養科学・食品科学の分野における研究活動を推進し、その研究成果を種々の手段により国内外の社会に発信する。また、様々な研究助成からの外部資金の獲得を試み、研究活動の推進に繋げる。
実行サイクル	__1__ 年サイクル（令和6年）
実施 スケジュール	(1) 栄養・食品科学分野に関連する国内外の学会に参加する。 (2) 栄養・食品科学分野に関連する和文誌や国際誌に投稿する。 (3) 外部資金獲得のために、科研費、財団の研究助成、学内プロジェクトなどに申請する。
目標達成を測 定する指標	達成度を判断するための指標としては、 (1) 教員の学会発表演題数 (2) 学術論文掲載数 (3) 外部資金への申請数 などを確認し評価する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	専攻内の各教員による学会発表演題数、学術論文掲載数、外部資金への申請数はおおむね認められたことから、適切な研究活動の推進が確認された。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし
根拠資料名	◆令和6年度活動報告（資料9）

3. その他に関する総合的事項

	①
目 標	学部からの研究継続による専攻の研究力向上と大学院における入学定員を十分に確保するために内部進学率の向上を目指す。
実行サイクル	____1____年サイクル（令和6年）
実施 スケジュール	(1) 学内推薦入試を実施する。 (2) 大学院特別講義への学部生の参加を促すことで、研究に対する意識付けに繋げる。 (3) 卒業論文研究への早期着手による大学院進学への意識付けを積極的に行う。
目標達成を測 定する指標	(1) 大学院特別講義への学部生参加者数により評価する。 (2) 内部進学生により評価する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	大学院特別講義への学部生の参加者数は100~110名であったこと、1年次配当科目の共通演習や3年次開講科目の栄養科学特論にて大学院に関する授業を行ったことで、栄養科学科の学生に対する研究および大学院進学に関する意識付けがある程度なされたと考えられた。学内推薦入試では、定員3名に対して3名の応募者があった。内部進学生は、博士前期課程で推薦入試2名、1期入試2名、2期入試3名の計7名であったことから、定員数6を充足した。卒業論文の早期着手に関しては、各研究室の状況などによりばらつきがあった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・
	【特色】 ・
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・研究室ごとに、卒業論文研究への早期着手はばらつきがみられた。
	【課題】 ・内部進学率の向上のために、各研究室での卒業論文研究への早期着手について継続して検討していく。
根拠資料名	◆内部進学率、進学者数（資料8）